南太平洋科學風土記

海野十三（佐野昌一）

第一回

はしがき

題して南太平洋科學風土記といふが、實は私が報道班員として南太平洋に勤務してゐた時に見聞したあちらの事情を、科學の目を通じて思ひ出すままにくり擴げようといふのである。餘り戰鬪や作戰とは關係のない至極のんびりしたものになるかも知れないが、これは戰鬪報道記ではないのであるから、そのつもりでお讀み捨て願ひたい。

船酔ひ

私たちがいよいよ南方へ下ることとなつて内地の港を出發したのは寒い一月の初めであつた。そこで私たちは二萬數千トンもある大きな船に便乘した。この船はそのトン數から見ても分るやうに非常に大きな船である。丁度甌を海に浮べたやうな恰好で、船足も餘り早くない。その上甲板では、普段なら野球が二組ぐらゐ充分出來るくらゐの廣さのものであつた。

かういふ大きな船に乘つて南へ下つて行くのであるから、われわれ仲間は所謂大船に乘つた氣持になつて、別に大したピッチングやローリングもなく、航海は船

醉拔きの至極安全なものであらうと考へてをつた。ところが實際船が港を出て或る海峽を越え、いよいよ太平洋に出たところ、もうそのとたんに仲間の數名はひどい船醉を感じて部屋の中にとぢ籠つたきりとなつた。私は多分その班員たちが出發前に心身ともに大いに疲勞してゐたので、その疲れのせゐで引籠つて居るのだとばかり思つてゐたが、扉を叩いて彼等の枕邊に立つた時、船醉であることを發見して非常に驚いた。なにしろこのやうな大きな船であるから、波が相當荒くても、また大きなうねりがやつて來ても、船はその波の上に乘つて殆んど搖れないで海峽を通り過ぎたので、

別に船醉をする餘地がなかつたやうに思ふ。然るにこの仲間たちは確に船醉を催してゐるので、私は船醉の原因がどこにあつたのかと、その意外さに目を見張るばかりであつた。

そこで私は、倒れてゐる仲間と色々話をして見たところ、當人たちは意外にも海峽あたりで相當船が搖れたといひ張るのだつた。しかもまだその前、船が港にゐる間にも、既に少々胸が變になつたといつてゐた。して見るとこの人たちは船に乘つた瞬間に、船がまだ動いてゐないのにも拘らず船に醉つてしまつたらしい。それに引續き船は海峽で少しばかり搖れたので、いよ

いよ船醉をひどく催したものらしい。私には全く不思議といふ外ない話であつた。

しかしよく考へてみると、船がまだ動いてゐないのにその船に乘つたばかりで船醉を感じたといふ話を、前にも聽いたことがあるのを思出した。その話は結局船醉を起させる原因は船の動搖ではなくして、船に於て感じられる異常な雰圍氣や臭ひなどに影響せられるところが多いといふ話であつた。例へば船に乘ると先づ非常に油臭い。これは船が重油を焚いてゐるから、當然油臭い臭氣がするわけである。それから部屋に入るとペンキ臭い。これは船には錆びないやうに天井も

壁もみんなペンキを塗つてあるからである、そのペンキの臭ひをいやでも嗅がされる譯である。又船が動かないときでもがたんがたんと大きな響を立ててエンジンが動き出すと、それが音響となつて耳に入つて來る上に、床だの壁だのが振動を始めるのでその振動が體を匐ひのぼつて頭に響いて來る。かういふことも船酔の原因になるらしい。

又、餘り船に乘つたことのない人は、自分は今船に乘つてゐるのだといふことを考へただけで、船酔を催すらしい。甲板などに出ると、普段見慣れない大きな海が自分の立つてをるところの、右にも左にも前にも

後にも擴がつてをるのを見て、不安な氣持に襲はれる。さらに進んではもしこの船が沈沒したらその時はどうなるだらうか。泳ぎに自信のない自分はどうすれば助かるだらうかなどといふ心配を始める。さういふ精神不安も、船醉の原因になるらしい。

かう考へれば船がまだ動かないのに船醉しても不思議はないし、こんな大きな船に乘つて船醉することも別に不思議とはいはれないのである。

私たちの乘つた船はそれからずんずん南の方に向つたが、天候は雪を交へた雲に追駈けられて海上は荒れ始めた。だんだん波が高くなる。それに後三日目まで、

船は相當ピッチングやローリングをやつた。その最中に、積荷が綱を切つて船艙をあちこちがらがら走り出すといふやうな騒ぎなどもあり、已むなく船を途中で停めて荷物を縛り直したほどであつた。したがつてその朝の間中船酔をしてゐる仲間の苦しみ方は相當同情に値するものがあつた。

その前から私は仲間に船酔の藥などを與へてをつたが彼等はまる三日といふものはたうとう食堂にも出ないし食堂から持つて行つた食べものも殆ど口にしなかつた。丁度その頃我々は黒潮の上を乘切つてゐたのだ。

やがてその潮も乘切つて四日目、五日目となると海

は次第に靜かになつた。さうして船醉してゐた連中もやつとベッド［＃「ベッド」は底本では「ベット」］からそろ〳〵起上り始めた。たまにはサロンの長椅子に出て來るやうにもなつた。かうして、内地を離れて五日振りでやうやく彼等は船醉から一先づ解放されたのであつた。それから南洋の或る港に着くまでその人たちは再び船醉をしないで濟んだやうである。このやうな苦しみを一度經驗して馴れてしまへば、その後はたとへ船醉ひをしても比較的樂になるらしい。

船醉のことについて私は出發前にこれも一つの準備と思ひ、永く海の生活をしてゐられたことのある先輩

に伺ひを立てたのであつた。その先輩に向ひ私は「どうしたら船醉せずに濟みますか」と訊いた。するとその先輩は非常に眞面目な顏になつて「あゝそれには非常に良いお呪ひがありますから、それを教へて上げませう」といはれた。私はそれを聽いて少からず失望した。お呪ひなどといふものはおよそ科學者と縁の遠いものである。だから、お呪ひを教へられても永い間科學畑に住んだ私共は迚もそれを唱へてみる氣になれないだらうと思つた。しかし折角お呪ひを教へてやらうといつて呉れたのであるから、聽かないのも惡いと思つて私は默つて耳を傾けた。その先輩は語を繼いで

「船酔をしないお呪ひといふのはかういふことです、つまり自分は決して船に醉はないと信ずることである。別の言葉で言へば、自己催眠を掛け、自分は船に醉はないぞと自分を信じさせることです、これが一番よく效きます」と言はれた。

私はこれを聽いて非常に感心した。これは單なる迷信の部類に屬するお呪ひではない、非常に科學性を持つたお呪ひである。成程これは效くかも知れないと私は思つた。これを要するに、絶對に船に醉はないと信ずることによつて船に醉はないで濟むわけである。かういふことはよく平常も經驗するのであつて、僅か幅

一メートルの溝川も、果して自分がこれを越えられるかどうかと不安に思ひながら跳んだのでは、足が石崖に引掛つたりしてたいてい跳越え損ねる。しかし、自分はこんな溝川なんか必ず跳越えられるのだといふ信念があつたなら、幅一メートルの溝川はおろか、たとへ幅二メートルの溝川でも至極見事に跳越えられるものである。また高跳競争をやつても或る日は一メートル半の棒を樂に跳越せたのに又別の日には何となくこの棒が跳越せない氣がすると、その日は何回やつてみても、その棒を落すやうなことがよくある。それも總て一番初めに持つてをる自信の程度によつてかういふ

結果が決るのである。であるから自分は決して船に醉はないといふ自信を初めに持つてをればさういふ自信を持つてゐないときに較べて遙に船醉をしないで濟む譯である。さういふところにこの船醉のお呪ひの科學性を感ずることが出來る。私は○○丸に乘船すると早速これを自分自身に試みた。私は南太平洋一萬五千浬を飛び歩いたが、その間一度も船醉を感じたことはなかつた。是は確にそのお呪のお蔭だつたと思ふ。

なほこの先輩はもう一つ船醉をしない方法を私に教へてくれた。それは更に科學的な手段であつた。それはどういふことであるかといふと、兩方の耳に大きな

綿を出來るだけ固く詰め込むのである。大きな綿でなければいけない、後で用がなくなつた時に耳の穴から綿を取出すのに困る。かうすれば外から來るあらゆる音を防ぐことが出來る。この音のなかには、船醉を誘發する音が交つてゐるさうである。これは陸上にはない振動の音であつて、船なるが故に特に出す特別の振動音がある。それが耳の穴から內耳に傳つて、そこにある器官に働く。さうするとそれが頭の神經を通じて腦に廻つて船醉現象を誘致するといふ話である。つまり科學的にいつて、船醉は船の中に於て發するところの特別の振動音によつて起るのだといふ見解に基き、

この振動音を内耳の或る器官に達せしめない爲に、耳の中に今述べた通り固く綿を詰め込むのである。「これも大變よく效く方法ですよ」とその先輩は私に話してくれた。この方法が果して效果があるかないか私は知らない。なぜなれば私は曩に述べた自己催眠の方法によつて完全に船醉をしないで濟んだので、この第二の耳に綿を詰める方法を實行する機會がなかつたのである。皆さんが試みられてもし第一の方法で利目がなかつたときは宜しくこの第二の方法を試みられたが宜しからうと思ふ。

船が段々南に降りて行くにつれて、海はびつくりす

るほど平穩になる。あたり一面、まるで湖水の如く、時には小波さへ立たないで鏡の如く靜かになることさへある。恐らく赤道附近が最も穩かではないかと思はれる。さういふところでは原住民は小さな丸木舟を操り遠く離れた島々までも舟を走らせる。これは日本近海ではとても出來ないことである。それほどあちらの海は靜かになる。したがつて船は動搖がなくなり、私達は船に乘つてをるのかどうかさつぱり分らないこともある。まつたくエンジンの音が聽えるので、やつぱり船は動いてゐるのだなと感ずるだけである。船に弱い人も、かういふところへ來れば、天國へ來たやうに

思ふであらう。

しかしかかる熱帯の海も一日中このやうな穏かな状態にあるのではなくて、時には非常に荒れることがある。それは例のスコールがやつて來る時だ。スコールはひどい夕立だと思へばいゝ。しかし内地の夕立とは異り、夕方に限らず朝でも來るし夜中にも來る。スコールの時間は、短いもので大體三十分、長いものになると二時間も降つてをることがあるが、まあ平均して一時間くらゐの長さのものである。この時は内地の大夕立に更に輪に輪をかけたやうなものすごい降りだ。アイスケーキほどの太さの大粒の雨が文字通り盆を覆

したやうに降つて來て視界はまつたく零となり、海上は大きな波が立ち、船は非常に動搖する。かういふ話をすると、船に弱い人は又悲觀をすることであらう。しかしこれは一日に一回ぐらゐのものであるから、さう大して氣にしなくても濟む。

或る時敵前上陸をするために私たちは舟艇に乘つて輸送船を離れた。その離れる前からスコールが迫つてゐて既にぽつりぽつりと大粒の雨が顔に當つてゐた。艇が舷梯を離れるや否や、もう篠つく雨となつて海上は大荒れに荒れだした。視界はまつたく屆かなくなる。私たちの乘つてゐた舟艇は約三十分ぐらゐで目的の海

岸に到着する筈のところ、スコールに惱まされて約一時間半も海上に漂つてをつた。この時私はスコールによつて海がいかに激しく荒れるかといふことをはつきりこの目で見た。舟の小ささかつたせいもあるが、それは私が度々紀淡海峽で非常に荒れた日に見た怒濤よりもはるかに大きな波が荒れ狂ひ、舟艇は幾度か大波に呑まれようとした。潮吹は舳先からうち上つて奔騰し、私たちの鐵兜の上からざざつと瀧のやうに降りて來る。スコールの雨粒の一つが頬に當つてもまるで大きな霰が當つたやうに痛い、そこへ持つて來て今申す瀧のやうな海水を頭からかぶるので私たちは舟の上にゐるの

だか波の中に漂つてゐるのだかわからないほどであつた。

舟は前後に激しくピッチングをやり又左右にひどくローリングをやり、今にも波の中に舳先を突込みさうであり、また舷を海水が乗り越えてきて、今にも沈みさうに思はれた。この時に例の船酔のとくに激しい仲間が、運悪くとでもいはうか、この舟艇に私と同じく乗り合してゐた。しかしこの大荒れにも拘らず、彼等は一時間半の大揺れにも、遂に船酔を感じないで、目的地に着いた。さうして元氣に飛上つて、特別陸戰隊と共に駈足で前進を始めたのには、私の方が驚いたほ

どであつた。
　これによつて見るも、船酔は精神の持ちやうによつて起つたり起らなかつたりするものだといふことがはつきりわかつたと思ふ。譬へ話にあるが、驅逐艦の水兵さんが、どんなに艦がかぶつても船酔しないのに、たまたま上陸して自分の郷里なぞに歸ると、ちよつとした渡し船に乘つて船酔を感じ、氣持が惡くなつたなぞといふ不思議な話があるが、これも今申した精神問題だと思ふ。

海の色

内地を出て南太平洋まで行くあひだに海の色はさま

ざまに變る。海の色がところどころによつて違ふといふ話はこれ迄に度々聽いたことがあるけれども、實際行つて見てかうも違ふものかと驚いた。我々が内地にゐたとき海の色といへば、あの藍を溶かしたやうな、そして幾分くすんだやうな色を考へるけれども、南の方に行くにしたがつて海の色は非常に鮮かに變つて來る。日本近海において見る海の色は何だか重苦しい感じがするのに對して、南の方の海の色は非常に明るい感じがする。

先づ内地を出てくすんだ藍色の海を一日半ほど行くといふと、海の色はさらに黒ずんだ色に變る。これは

所謂黒潮に打突つた證據である。黒潮の色はその名の通り全く黒つぽい。この色をもう少し詳しく言ふと、藤紫を非常に濃くしたやうな色である。この海が夕方暮れてゆくとさらに黒さを増し、まるでアンチモニーを融かしたやうな、金屬的などつしりした色に變る。さういふ見慣れない海を見てゐると内地を遠く離れたことをはつきり感ずる。黒潮の通つてゐるあたりはまだ相當波が荒く、海は何だか生きもののやうに見える。

船の舳先に掻分けられた波は船尾の方まで白い泡となつて湧き立ち、はるか後方まで白い航跡を引く。この白い泡は非常に美しくて、よくいはれる譬だが、シャ

ンパンの杯に湧き立つ泡のやうな感じがして、掬つて飲んで見たくなる。白い泡と眞黒な海水との間には、兩方の混じつた非常に青い海水が漂つてゐる。

うねりが相當大きくなる。その間に飛魚が何尾も群をなしてすつすつと飛ぶ。飛魚は船が近付いたので、びつくりして、波間から飛立つのである。翅を擴げて、見事な滑空をして、十メートルも二十メートルも飛ぶ。飛魚の體は銀色に光つてまるで砥ぎ澄ましたナイフを投付けたやうに見える。さうして長い滑空の末に眞黒なうねりの横腹にぷつりと頭を突込む。飛魚の頭が碎けたのではないかと思ふほど痛々しく感ぜられる。そ

の時に僅な白い水煙が立つ。飛魚は大きいのもあるし又非常に小さいのもある。大きな飛魚は、滑空距離も長く、五十メートルも百メートルも、翅を休めないで飛んで行く。飛魚が船の舳先から、横から、ぴよんぴよんと幾つも幾つも飛出す景色はまことに愛らしく又滑稽である。飛魚の飛んでをる海は長い航海者には一つの樂しい觀ものである。

かうして海を段々南の方に行くにしたがつて、どこからともなく白い鷗が飛んで來たり、或は又燕尾服を着たやうな恰好の燕の大群と一緒になつたりする。

黒潮を越えてしまふと海は急に色が淡くなる。その

色は非常に鮮かな青い色である。南洋附近に來ると海水の色はさらに鮮かさを増す。本當の青といふ色は日本には餘り見當らない色のやうに思ふ。一般に日本人が青いといへば何となく松の緑のやうなくすんだ色を思出すのであるが、こゝに言ふ青い色とはそんなものではない、さういふ海の色を見て、成程天地の間にはかういふ美しい青い色があつたかと、青といふ色彩を改めて感じ直すのだ。この美しい青色はどんな色かといふことをとても簡單に説明することは甚だむつかしい。あまりいい説明ではないが、青いゼリーのお菓子を思出して戴ければ、割合にあの南の海の色に近いと

思ふ。實際餘り美しいので私たちは暑い太陽の下に冷いゼリーを思出してゐた。

南洋方面には珊瑚礁が非常に多い。珊瑚礁の上に乘つてゐる海水はさらに鮮明度を増す。内地へ持つて歸つて子供に見せてやりたいやうな美しい色だ。或るものは緑青を薄く溶かしたやうな色をしてゐる。海面に出てゐる珊瑚礁に大きな波が押寄せて來て白く碎けるが、その波頭の眞下に世界中で一番美しい青い海水を見ることが出來る。珊瑚礁は防波堤のやうに島のはるか沖合を取卷いてをるが、さういふところに緑青を溶いたやうな青い海の色が熱帶の太陽を浴びて、その上

に白い波頭が幅廣く縁取つてをるのは實に美觀である。かういふ緑青を溶かしたやうな青い海は南洋から始まり赤道を越え、さらに南下してビスマルク諸島、ソロモン群島、ニューギニヤの方面までずつと續いてゐるのである。

私はニューブリテン島のラバウル港で、海の中に安全剃刀の刃を落してしばしば樂んだ。舷に立つて安全剃刀の刃をぽとんと海に落すのである、さうするとその安全剃刀の刃は白く光つて海面に落ちてからそのまゝ靜かに海中へ沈んでいく、それが何時までもいつまでもきらきらと銀色に光つて見えてゐるのだ。ラバ

ウル附近は相當水深があるのであるが、安全剃刀の刄はなかなか底に達しない、私は時計を出して時間を計つたことがあつたけれども、安全剃刀の刄が見えなくなるまでとても時計を見てゐるのが退屈になつたほどである。

しかし南太平洋に於て、海岸から入江になつて、奥の方へ河が續いてゐるやうなところでは、海の色はかなり濁つてをる。あちらの方の河は美しい清らかな海とは違つて泥水であつた。その河も非常に緩かな河であるが、それが泥水を浮べて入江から海岸の近くを褐色に濁らしてをる。さういふところには魚の子共が非

常に夥しい大群を成して集つてをる。魚の黒い背がさういふところの海の色をさらに黒くする。

　船の上からは今申したやうな透明な海水を通じて海底の模様がよくわかつた。珊瑚礁が下の方から黒い影をして［＃「影をして」はママ］盛り上つてをるところもよく見えたし、もつと淺くなると海の底が太陽の光で白く光つて見え、そこに菊目石のやうな白珊瑚の固りや、枝を成した白珊瑚などがまるで林のやうに美しく海底に咲亂れてをるのがよく見えた。またその珊瑚礁の間には眞黒な海鼠がくつ附いてゐたり、海膽（うに）のやうなものがへばり附いてゐたり、又大きな五本の指を伸

したひとでが赤い腹を見せて這つてゐたりする。それから魚が泳いでゐるのも見えた。こゝいらの魚は非常に色彩が鮮かで毒々しい色をしてをる。赤い魚、青い魚、紫の魚、縞のある魚、内地ではとても見られないやうな熱帶の魚族が珊瑚の間を縫つてをるのを見て、龍宮とはかういふところぢやないかと思つた。

しかしかういふ美しい海もスコールが起きて來るといふとまつたく體の色を變へてしまふ。スコールに叩かれる海面はその大粒の雨によつて眞白になる、しかし舷から波立つ海面を見れば、海の色は非常に濁つて黒ずむ。それがスコールが引いてしまへばまた元の鮮

かな色に返る。海は激しやすいカメレオンのやうに思はれた。

『科学知識』昭和十八年四月号

第二回

船と暑さ

内地の港を船で出たのは一月四日だつた。内地では冬のまんなかである。だから服裝は、本來なら、下は駱駝の毛のシャツ、上に厚い背廣を着て、その上に首をマフラーで包み、その上をさらに丈長のオーヴァーコートで身を固めてゐてなほ寒い季節であらう。ことに海に出るのであるから、ジャケツがもう

一枚ぐらゐ欲しいところであつた。

しかし私たちはさうしなかつた、といふのは、これから暑い南の方へ行つて生活することになるから、向ふではかういふ冬の支度は不要である、故に出來るだけ身輕にして行きたいと誰しも思つてゐた。

私はその爲に、背廣以下は冬のものを着てゐるが、オーヴァーは脱いでレインコートに着換へてゐた。冬のまんなかをレインコートといふいでたちで親類の家を訪問して別れの挨拶などをしたので、向ふの家の者は驚いて「そんな寒い恰好では」と心配してくれ、たうとう背中に眞綿を背負はされた。

そんな恰好で私は船に乘つた。ところが集つて來た仲間の者を見ると、それぞれ輕裝になつてゐる。なかには背廣の上に襟卷をしただけでぶるぶる震へてとび込んで來たのもあつた。「オーヴァーはどうしたんだ」と聽いた、するとその仲間は答へて曰く「オーヴァーを賣り飛ばしてみんな飲んで來たよ」とちよつと肩を張つてみせたがその下から大きな噓をたて續けに五つ六つして「ああ寒い、少し早まり過ぎたかな」と慌ててサロンの中へとび込んだ。

船は出た。空からはちらちら粉雪が降つて來た。それに風が少し出て來たものだから甲板の上に立つてゐ

ることは出來なかつた。從つてみんなサロンへ入つてビールを出して貰ひ、それで身體を温めてゐた。

そのうちに私たちの船室が割當られた。私はずつと艫の方の船室であつた。中に入つて見るとスチームが通つてゐた。長椅子に座るとお尻の方からぽかぽか温い。それでやうやく元氣が出て來た。その夜はスチームのお蔭でぐつすり眠ることが出來た。

翌日になつた。二日目だ。

船はどんどん進む。寒さは昨日と同じだ。しかし夜中になつてスチームが何だかいやに暑く感ぜられて、寢卷の下に着てゐた冬シャツの胸のボタンを夢中で外

したことを覺えてゐる。
その翌日になつた。三日目だ。
甲板へ出て見ると風が生温かくぽかぽかして來る。まさしく陽春四月ごろの陽氣だ。直射日光が暑くて額が汗ばむ。
丁度海の色は藍色に變つて美しかつた。
午後はとてもやりきれないので冬シャツをたうとう脱いでしまつた。さうして服は冬の背廣だが、下着のシャツをクレップの薄いものに換へた。
やがてその日も暮れた。今夜は部屋にスチームは通らない。それで丁度好い氣持※［＃判読不可、103-下-10］

ぐつすり眠つた。

夜が明けた。四日目だ。

氣温はぐんぐん上つて來る。正午の氣温は二十四度。もちろんオーヴァーなぞの用はない。甲板をポケットに手を突込んでぶらぶら歩くと襟元を過ぎる風が涼しい。

夜は急に寢ぐるしくなつた。まるで蒸風呂に入つたやうだ。尤も夜は燈火管制を嚴重にするので、舷窓はぴつしやり締め切り、入口も戸を締めるから、どこからも空氣の脱けて行くところがない。おまけにエンジンルームからの熱が傳つて來る。

ベッドに上つたが、全身汗だらけになつて度々目が醒める。

その夜も明けた。五日目だ。

朝案外涼しい。船醫の話では明け方にスコールが通つたのでかう涼しいのだとの話であつた。もうスコールが來るやうなところまで來たかとちよつと嬉しくなつた。

食堂へ出て見ると扇風機がぶんぶん廻り始めた。それに吹かれながら、好い氣持になる。

内地を離れてから五日目だが、もうすつかり夏の氣温だ。

長いズボンを穿いてゐるのが苦しくてならない、つひに今日よりゴルフパンツを引張り出して半ズボンの姿になる。

その日も暮れた。やがて六日目がやつて來た。誰の姿もすつかり夏の服裝である。中に一人、冬服で來た男があつた。いくら服を脫いで上はシャツ一枚になつてみても、長い冬のズボン下があるので、下からむんむん蒸す。苦しくて敵はんと朝から云つてゐたが、やがて晝飯の時にサロンへ出て來た彼の姿は俄然半ズボンになつてをつた。ところがその半ズボンの形が少しをかしい。「到頭半ズボンをどこかで手に入れて來た

ね」と云へば、彼は天井を向いて「わはつはつ」と笑ふ。傍に仲間がゐて、「先生到頭暑さに參つて、冬のズボンを膝の上でちよん切つたんですよ」と云つて、これ亦大きな聲で笑ふ。私も笑つた。この先生が冬ズボンに鋏を入れる時の顏付を想像してをかしくてたまらなかつた。だが御當人はすつかり好い氣持で、長々と脛を出してをつた。その脛には熊襲のやうに黒々と長い毛が生えてゐた。

　サイダーが盛んに賣れる。幾ら飲んでも喉が渇く。上に着けてをつたノーネクタイのワイシャツが暑くてたまらない、到頭之を脱いで網目の半袖のシャツに換

へる。下はゴルフパンツだから、すつかりフェヤウェーに於けるゴルフ姿と思つた。

この日猛烈にスコールがあつた。豫ねてスコールは激しい夕立だと聽いてゐたが、激しい夕立どころの騷ぎではない。船はすつかり眞白い雨で包まれてしまつて、前方が全く見えなくなつた。雨の落ちてゐるところは眞白な傘を降ろしたやうである。その間にぴゆうぴゆうと涼しい風が絶えず首筋を冷やす。それでも別に上にものを重ねて着る氣持は起らなかつた。

夜はこの數日來汗だらけの身體で轉々反側、しよつちゆう目を醒ましてゐる。ベッドの上が汗でべたべた

に濡れてしまつた。

その日も暮れて七日目の朝が來る。

もうどうにもならぬ熱帯の暑さだ、誰も彼もはあはあと犬のやうに喘いでゐる。

かう暑くてはたまらないといふので、思切つて、一種の反對療法で、船内で一番暑い機關室見學を許して貰つた。

中は猛烈な暑さだ、寒暖計を見ると水銀が四十度のところに廻つてゐる。十五分間で大汗をかいて上甲板へとび出す。海原から吹付ける涼風の涼しいこと！

サロンの寒暖計は二十九度だ。海水の温度がそれよ

りもう一度低くて、二十八度である。水温が攝氏二十六度。その以上［＃「その以上」はママ］になると、船から絲を降ろして囮の餌を附けると魚が喰ひつくといふ話であつた。艫の方に行つて見ると、成程その絲が引張つてある。暫く見てゐると本當に魚が喰ひついた。いゝ、しいらといふ魚だ。色の黄いろいなんだか西洋鋸のやうな魚である。

みんなの顔が相當黒くなつた。

それから先は次の日も、又その次の日も同じことである。到頭暑さの絶頂に來たのだ。

風が舳先から吹いてゐる時は甲板にゐても非常に涼

しいが、風が變つて船の後から吹くと、甲板にゐても風があまり吹かない。そのときの蒸し暑いことといつたらない、まるで夕凪の中にゐるやうな氣がする。私は一生懸命に扇子を使つたり、又サロンへ逃げて扇風機に當つたりする。しかしその風も、風が當るといふだけで、生温かい。涼を求めてさつぱり涼を得られないので段々腹が立つて來る。船室で辛抱して寢てゐたが、どうにも我慢がならない。

そこで到頭一つの企を考へた。それは毛布を持つて甲板に寢ることである。これはいい考へだといふので、仲間の者がみんなそれを眞似して、毛布と枕を持つて

甲板へ出た。ある者はハッチの覆ひの上に毛布を擴げ、又ある者はベンチの上に擴げた。

涼しい風が吹きこんで成程いゝ氣持だ。

寢ながら星が見える。もう熱帶へ入つたから星はきらきらと美しく輝く。その數も内地で見るよりも十倍も二十倍も數が多い。

これは大變な風流だとみんな喜んで寢てゐたが、夜中にひやつと冷いものが身體に落ちて來たので、びつくりして目を醒ました。

ぽつんぽつんと大粒の雨が顏にかゝる。スコールだ、愚圖々々してをるとあの瀧のやうなスコールにずぶ濡

れになる虞がある。仲間を叩き起した。みんな殘念さうな顔をして船室に歸つた。

船室の中は超蒸風呂だ。その時ぐらゐ情なかつたことはない。

到頭明け方迄眠れなかつた。

船と風呂

われわれ日本人は頗る風呂好きである。

内地の港を出た時は眞冬だつたが、それでもわれわれは毎晩風呂に入れと勸められ、毎晩缺かさず入つた。

入らなくてもいゝのであるけれども、船の風呂がちよつと珍しかつたからだ。

その風呂は、鹽湯だつた。詰りこれは海水を汲み揚げて、それを機關室からの熱い蒸氣で熱するのである。その湯槽の傍に眞水の入つたタンクが附いてゐた。鹽湯に入つた後でこの眞水のタンクから少量のかゝり湯を汲み出して身體を洗へといふことであつた。

鹽湯は珍しかつたので初めはみんな喜んで入つたけれども、しまひには悲しくなつた。どうも身體が何時までもべた附いていけない。それを取るには勢ひ眞水のタンクから澤山かい出さなければならない。ところ

がそれをあまりかい出すと底が見えて來て、後で入る連中の使ひ水が無くなる。内地の習慣が殘つてゐてこの眞水のかゝり湯はさう儉約出來ない。從つて後から入る者の二三人は鹽氣の拔けない身體で寢床へ行かなければならなかつた。

こゝでもう一つ困つたのは、浴室が猛烈に蒸し暑いことであつた。何しろ機關室からの蒸氣といふものはひどい熱である。船室にゐてさへ蒸風呂のやうであるが、この浴室の中の蒸し暑さ加減といつたらまるでトルコ風呂だ。だから浴室へ入つた途端に頭がぼうつとなつてしまふ。

もう一つ困つたのは鹽水では石鹼が使へないことだ。いくら石鹼を兩手で揉んでみても泡が立たない。仕方なく眞水の方で石鹼を溶かす、それを身體になすり附けると又かゝり湯が要つて、甚だ水の濫費になる。船員はどういふ工合に風呂に入つてゐるのかと疑問を起した。

五日目に一度眞水の風呂がたてられる。今日は眞水の風呂だといふ掲示が出ると、みんなはどつと聲を擧げて喜ぶ。

その夜眞水の風呂に入つた。全く氣持がいゝ。淸々として身體はべと附かない。矢張り風呂は眞水に限る

と、みんな長い風呂になつてしまつて、後から入る番の仲間にせき立てられるといふ有様であつた。
南洋に着くまでに、眞水の風呂は二度入つたきりである。
熱帶に入つてからみんな皮膚病に取付かれた。先づ足の指の股に水虫が出來た。こいつはどんどん殖えてしまつた。次に睾丸が痒くなつた。いんきんらしい。もう一つ全身に長い吹出ものが出來た。痒くてならない。是は汗疣だ。
さういふ皮膚病に罹つて鹽湯に入ると篦棒に痛痒い。患部をよく水で洗つて鹽氣を取除くのであるが、何し

ろ糜爛してゐる患部であるからなかなか鹽氣が拔けない。その爲に段々症状が惡化するやうな氣がした。ある男の説では鹽湯は汗疣の藥だよと聽いたが、どうもこれは當にならないやうだ。

それから五箇月程經つて私は又別の船で南洋から内地へ歸つて來た。この船は初めの船とは違つて大變設備がいゝ船であつた。船客も少く、而も私が一等船客の主席であつた。その爲に客室も立派であつたし、入浴も眞先にボーイさんが案内してくれた。

浴室は頗る豪華なものであつた。何だか内地のホテルへ歸つて來たやうな氣がした。しかし矢張り大理石

のバスの中は鹽湯だつた。石鹼を溶かしても一向溶けないあの鹽湯である。

しかしこの時には私はもう大分鹽湯の扱ひに馴れてゐた。眞水を使つても、小さな桶に三杯使へば充分であつた。これは戰線に於て長い間巡洋艦などに乘つてをつて貴重な眞水の使ひ方を充分會得した爲であつた。

船が愈〻内地へ近付き、もうあと一晩である港に入るといふ夜、眞水の風呂がたてられた。この時ばかりは文字通り蘇生の思ひがした。何しろ往きと違つて、歸りには戰地で得た皮膚病が猛烈にひどくなつてをつた。水虫はいゝ藥があつてうまく治してゐたが、當時

第何回目かの汗疣に罹つてゐたし、もつと困つたことにはいんきんは非常にひどくなつてゐた。おまけに戰地でどこから得たか、田虫まで背負ひこんで、身體の方々に赤い輪が出來てゐた。さういふ状態で鹽湯につかるのは樂なことではなかつた。

序でだから言ふが、この頑固な皮膚病も内地へ着いて四五日温泉に入つたりなぞしてゐると、けろけろつと治つてしまつた。

軍艦にはバスがある。われわれは士官用のバスに入つた。毎日缺かさず入つたが、有難いことに眞水の風呂であつた。但しバスの中に入つてをる湯の分量は非

常に少い。身體を横にして湯が僅に股の上に來るくらゐであつた。だから全身をつけるといふやうなことは出來ない。手で以て盛んにこの水を搔き廻して身體中にかけるより仕方がないのだ。又バスの中の湯は確に湯ではあるけれども、温度が低くて、中へ入るとひやりと冷い感じがした。

バスの外にパイプが引いてあつて、これから使ひ水が出る。この使ひ水の方がよつぽど熱かつた。これは嚴重な制限があつて、小桶に三杯以上は使へない。この水が蒸溜水であるとは豫ねて知つてゐたから、餘計に水が尊くなる。

汽船の中ではそれ程にも感じなかつたけれども、軍艦の中ではどんなことがあつてもその規約を守らなければならぬと思つたので、私は色々氣を使つて、制限内の水でうまく身體を洗ふことにした。氣を付けてやれば決して出來ないことではないのだ。しまひには二杯ぐらゐの水で、身體を石鹼まで附けて淨めることが出來るやうになつた。

洗濯もこのバスの中でよくやつた。それにしてもあと一杯ぐらゐの水で充分洗濯が出來る。身體を洗ふ前に先づ洗濯すべきものを順々に重ねて置いて、それからその上に立上つて、身體を洗ふ爲に石鹼をなすり附

ける。それから手拭でごしごし石鹼を揉んで身體を洗ふ。その石鹼水が身體を傳つて段々足から洗濯ものの上に落ちて滲み込んでいく。

かうすると身體を洗ふ爲の石鹼は石鹼水となつて洗濯ものをたつぷりうるほす。身體を洗ひ終つたら愈々洗濯にかかるわけだが、洗濯ものはさつき言つたやうにすつかり石鹼で濡れてゐる。一番上にある洗濯ものを兩手でごしごし揉む。その時に石鹼の泡が立つて下に落ちるが、それは石鹼水がこれから洗濯する汚れものの上に落ちるのである。

かうして次々に洗濯ものを揉んでいけば、最後まで

石鹼水は、たつぷり汚れものに滲み亘るわけだから、石鹼も節約出來るし、水も節約出來る。

かうして置いてあとは充分絞つて石鹼水を切り、最後に桶の中に入れて水で濯ぐのである。少しぐらゐ石鹼が殘つてをつても、よく絞つた上、寢床の上に吊つて乾かせば、一時間乃至二時間の間に、さらさらして乾いてしまふ。さうして肌に着けても、別に氣持が惡くないのである。

内地へ歸つてからもこの習慣が殘つて、水をあんまり前のやうに浪費しなくなつたのはわれながら嬉しい

ことである。

『科学知識』昭和十八年五月号

底本：「海野十三メモリアル・ブック」海野十三の会
　　2000（平成12）年5月17日第1刷発行
初出：「科学知識」
　　1943（昭和18）年4月号～5月号
※「愈ゝ」と「愈々」、「お呪ひ」と「お呪」の混在は、底本通りにしました。
入力：田中哲郎
校正：土屋隆
2005年1月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。